

私のオーディオ的偏見
良い音ってどんな音？

山本 一成

1995年4月入会

「理想の再生音とは？」「自分の好みの音はどんな音だろうか？」

半世紀もの間、この重要命題を常に想いをいっぱいにして解を求め続けて来た。当初は生のコンサートを多く聴きもしたし、様々な情報を取捨選択して試行錯誤を繰り返してき、無駄な経験と散財もしてきた。真っ暗な洞窟の中の幾重にも分かれた迷路の中を出口も分からずさまよい続けてきて、相当の月日を費やし、早く一条の光を見つけたいそのような想いであった。何故なら音楽を聴いていても「何処か違う」との想いがいつも頭をよぎり、真に楽しめなかったからだと振り返ってそう思う。生の演奏とまでは行かないにしても実在感のある音にしたかったのだと思り返す。

そんな真摯な求道精神(?)の過程で、オーディオ雑誌(「サウンドステージ」)の記事に『オーディオを楽しむ人は再生音のクオリティーを徹底的に拘る「純粋オーディオ派」と音楽を楽しむ事に徹する「音楽派」の二つに分かれる。』特に「音楽派」は声高に「音楽の好きな人にとって一番大切なのは音楽を聴く事であって、それをどういう音で聴くかはあまり問題ではない。」この言葉に当初はショックを感じたが、私にとって、この境地に達することがなかなか出来ないし、本当にそうだろうか疑問視もしてきた。LP、CDに録音されている情報の技術的な部分だけでなく演奏者の情感、空気感などが最新技術を駆使した再生音として表現されれば感動も新たになるはず。SP時代のカールソーの再生音での「演奏の力」は感じ取れても、ノイズの多い音には感興がそがれて、現在の録音技術、再生技術で再現できたら更に素晴らしいはずだと私としては思わざるを得ないのだ。

さて、最新の技術とは述べたが、現在のオーディオ装置に関して生の音にどれだけ近づいているのだろうか。私見で結論的に言うと、生の演奏の再現は幾ら技術が進歩しても再現できるはずがないと考えている。『再生音はあくまでも再生であって本物ではない。』(日本コロムビア:高橋幸夫氏)。言うまでもないことだが、コンサートでは演奏者の音を直接肌で感じて聴くことが出来る。指揮者の顔、振る舞いと視覚で感じた事も音に臨場感を与える。会場の作り、客席の位置で音の違いは出るが、それでも生の音はキツイ音、嫌みな音など一切ない。神崎一郎氏(オーディオ評論家)の言葉を借りるならば「生の楽器はニュアンスにあふれる。堅くても堅くなく、柔らかいのにしっかりしていて、こりっと力強いのにふわっと優しい。」つまり演奏者と聴取者との間には心地良い空気しか介在しないのだ。

一方、再生音は衆知のことだが、CDを例に取れば最初に生の演奏をマイクロフォンで拾い、種々デジタル処理し、CD化する。この録音過程で更にプロデューサー、エンジニアの意志が反映されリミッター、イコライザー処理され生の音でなく加工された音になる。こうしてパッケージされた音を再生側は装置を(スピーカーを含め)いろいろ吟味し選択して再生するのだ。更に部屋の状況、電源の状況、ケーブルの選択、振動対策等々で生の音とはどんどんかけ離れていくのである。あまりにも変動ファクターが多すぎて、本来生の演奏は一つなのに、特に再生側の対応でいくつもの再生音が出来上がってしまう。CDを貸し借りして「あまり良くなかった」など曲の印象が違うのは個々の感性の違いは勿論だが、装置を含めた再生環境の相違が重要な要因の一つとして存在する。ましてや個人の耳の老化問題もある。

話を戻して、現在録音サイドの一番の問題はマイクロフォンの性能に進歩が見られないと言うことの様である。(前出:神崎一郎氏の弁)こうなると入り口の段階でもう既に生の音でなく何をか言わんやだ。このように言ってしまうと、やる気、元気がなくなるが、そんな中でも最近の動きとして一つの光明と思えることは、音の質、特に空間表現(サウンド・ステージ、サウンド・イメージ)の点で、「再生音にしては」との枕言葉付きだが深化が見られていると思う。演奏会場の雰囲気を感じられる再生音が少しずつ出現してきている事は、偉そうな言い方ではあるが、再生音としての目指す一つの良い方向性であると感じる。

さて、ここから本題の「私のオーディオ的偏見」に入るのだが、私はオーディオ評論家の菅野沖彦氏の「レコード演奏家」という言葉が好きだ。「どの様に自分の好みの再生音に仕上げるか」至極創造的な言葉だと思う。巷間、音は個人の感性の問題であるから良い音は一つではないと、自分が満足出来ればそれで良いのだと言われる。確かに一つの側面ではあるがしかし、「あるレベルまでは普遍的なクオリティーを達成する事が大事」で、良質な再生音を求めるからには、そこから先が重要なのだ。単に好みの問題として片付けられない様々な機会を得て(コンサート、会員の音を試聴する等々)体験を積み重ね、自分の限られた制約(この年齢では新たに装置に対して投資は出来ない。)の中でも、音をよくなる方策はあるはずだ。諦めないで模索する、求める想いが良い音への道であり、自分の好みの音に仕上げていく努力がどうしても必要になってくる。そのポイントは順番として音の純度を追求するよりも、部屋の音響条件を整えることが私の経験からも重要だと考えている。その過程でわくわくする事が若返りの秘訣(笑い)でもあるとも考えていて一石二鳥だ。その効果が、ある日ある時突然(何故か突然気がつくのだが)感じられたときは、まさに至福である。毎日が楽しい。とは言え求め尽くしたらキリがない、上には上があるオーディオの世界。そのことを弁えた上で、努力した結果が自分を満足させられれば良しである。

長い試行錯誤の結果、私の求めて来た好みの音は「コンサートホールなどで聴く生の演奏の感激を追体験出来る再生が良い音」つまりHPの「私のオーディオライフ」でも述べたが「実在感のある音」。オーディオ用語で言えば「S/Nが良くてバランスの良い音」である。同時に奥行き、左右の広がりだけでなく高さも含めた空間表現(サウンド・ステージ、サウンド・イメージ)が良いことと行き着いた。。現在は洞窟から一つの出口(完璧に正解ではないが)から這い出て、求めていた音に近づいたと自分を納得させられる。音楽に浸れる時間を多く過ごせる。長い間の「何かが違う」との疑念から解き放された感じがしている。

大変独善的で押しつけがましい文章になってしまった。タイトルに免じてお許しを頂きたい。反論をお待ちしたい。「求めよさらば与えられん！」である。

「我が意を得たり」の文章を見つけたので、2つ紹介する。



● 岡本暁生著「音楽の聴き方」(音楽評論家)(中公新書)より

『音楽・音の善し悪しに対する反応が「相性」のみに還元されてしまうのだとすれば、それはいかにも寂しい。「その人が良い／良くないと言ったんだったらそれでいいんじゃない、蓼食う虫も好き好きなんだから。」その程度のものしかこの世に存在しないのだとしたら私たちはいったい何のために音楽を聴いているのだろうか。私が言いたいのはつまり相性だの思考だの集団的な価値観(好き嫌い)の違いだのと言ったことを突き抜けた、有無を言わせぬ絶対的な価値の啓示というものも確かに存在すると言うことだ。』

● 谷崎潤一郎の「文章読本」の中のお酒の品評に関しての一節に、『洗練された感覚を持つ人々の間では、そう感じ方が違うものではない。すなわち感覚というのは、一定の錬磨を経た後には、各人が同一の対象に対して同様に感じる様に出来ている、と言うことです。それ故にこそ感覚を研くことが必要になってくるのであります。』(注:要約)

つまり、逆に解釈すれば素人同志の間では評価がまちまちになる。これはお酒に関する味覚の話だが、再生音や音楽そのものの評価に置き換えて見ること出来ると思う。



左から山本・越川・新田の三氏

